

広報

TOBETSU

11

1996年11月1日発行

No.518

発行 北海道当別町 編集 企画部企画課

とうべつ



『388人が当別を駆け抜ける。』

(町民19人も参加した石狩平野ちょっとサイク・10月6日・蕨岱)

町の人口20,069人(男性9,989人・女性10,080人)世帯数7,155世帯(10月1日現在)前月より30人・10世帯増

「ゴミ箱の数を増やさなければならぬし、どうして……？」と言つた疑問を持つている方もいるのではないでしょうか。

その理由は、組合加入の市町村が負担することになる施設の修繕費を少なくするためなのです。

と言うのは、焼却炉の内壁には耐火レンガが張られているのですが、

ゴミの中に高熱を発生して燃えるプラスチックや発泡スチロール、ビニール（燃やせないゴミ）などが混

ざつていると、この耐火レンガの寿命が縮まってしまうからなのです。

耐火レンガの張り替えには数千万円の修理費がかかるもので、この費用は当然、当別町など加入している5市町村が負担しなければならないのです。

町が、「燃やせないゴミ」を分けていただいている理由には、ゴミ処理にかかる町の負担を抑えるため、すなわち税金などで助かれている町の支出を抑えるためなのです。

回収は二重の得

一石二鳥の資源回収

かつてゴミの処理は、安価な処理方法として埋立されていた時代が長期間ありました。

しかし、生産活動の活発化・消費の拡大や使い捨ての風潮も伴ってゴミの量は年々増加し、ごく自然の成り行きとしてゴミは私たちの回りにあふれ出し、不法投棄やゴミ処理問題とともに大きな社会問題に発展してきました。

ゴミ処理の方法は、公害の誘発や生活環境の悪化を避けるため埋立から焼却による方法に移行しました。

また、一方では、ゴミの処分経費を少なくするゴミの減量化とともに、資源となるゴミを回収して有効利用する「リサイクル」の重要性が再認識されるようになりました。

当別町では、町が行っている「資源ゴミ」の回収のほか、町内会や育成会などが資源ゴミの回収を行っているほか、日赤奉仕団や町消費者協会・女性団体などが、不要になつた衣類や日用品・子供服などの再活用セールを開いています。

町内の全ての実施団体を調査できたものではないものの昨年度、若葉町・北栄町・栄町・西町などの育成会や町内会などが回収した新聞紙や

牛乳パックなどの資源ゴミは、合計約401tにも及んでいるのです。昨年度のゴミ処理費は1,174万円で、これがだけで約1,100万円の町費と樹木などを節約されたと同時に、各団体にも益金が支払われたのです。

冬季間は除雪の後に

ステーションへのゴミ出し

収集車によるゴミの収集開始時刻と終了時刻は、収集の順路や収集地区の広さなどによって異なりますが、町は収集日当日の午前6時から午前8時までの間に出ていていただくようお願いしています。

「当日の午前6時から」としているのは、地域の美観を損なわないようになるとともに、犬やカラスなどによるゴミの喰い散らかしを少しでも防ぐためです。

また、8時までに出していただく理由は、ゴミの収集作業を8時から開始するためなのです。

ただし、道路の除雪作業が行われる冬季間は、除雪車が通過した後に出すようお願いします。

除雪作業に支障になるとともに、あなたが出したゴミが、お隣や近所の玄関先に散らばつては大変不愉快な思いをさせてしまします。



西町の育成会では、会員の大人と子供で行っていた廃品回収を、平成6年からは町内の業者にお願いしています。

業者との調整はいたって簡単で、業者の都合のいい収集日・収集してもらえる資源ゴミの種類・出す時刻と出す場所などの申し合わせをする程度です。町内会の皆さんには、回収方法が変わったことなどをマメにお知らせすることくらいです。

それまでは年に3~4回の収集がやっとだったんですが、この方法だと年に10回できるので町内からも喜ばれています。益金は活動費に使わせてもらっていますが、西町は年間10万円を超えています。皆さんの育成会でもいかがですか？

西町青少年育成会
宮入英則会長
(43歳)

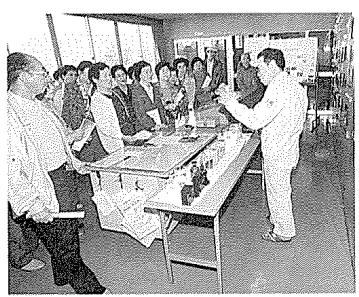
ゴミの分別（ゴミカレンダーにも登載しています）

区分	ゴミの種類	出す前の注意
燃やせるゴミ	残飯などの台所ゴミ、紙、衣類、布くず類、食用油、木くず、枯れ葉、ダンボール、灰、犬猫の砂、紙オムツ（汚物は除去）、貝がら、草花、カセットテープ、ビデオテープ。	本片は長さ50cm太さ10cm程度の物まで、ダンボールは50cm位にして。
燃えないゴミ	せともの、ガラス、スチール缶、なべ、スプレー缶などの金属類、油ビン、ウイスキーなど酒類のビン（1升ビンは資源ゴミ）、金属系のオモチャ、陶器の植木鉢など。	スプレー式の缶は釘やドライバーで穴を開けてガス抜きを。
燃やせないゴミ	プラスチックやボリ製品、発泡スチロール、ゴム・皮革類、スニーカー、アルミホイル、ビニールやセロハンの袋など。	中身は全て取り除く。
資源ゴミ	新聞、雑誌、紙パック、アルミ缶、空ビン（酒、醤油の1升ビン、ビール、コーラ）、ダンボール。	再生して利用します。
粗大ゴミ	家具類（机・たんす・ソファー・戸棚）、布団、毛布、ジュータン、テレビなどの電気製品、石油ストーブ（灯油は完全に抜く）、自転車、スキー、自分が解体した廃材など。	庭木などは長さ1m程度に切り束ねて。

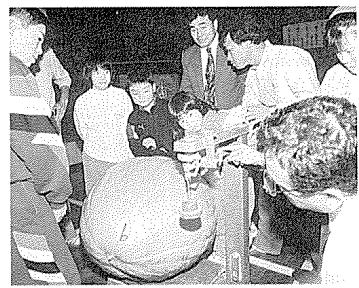
処理できないゴミ ~25型以上のテレビ、250リットル以上の冷蔵庫、タイヤ、バッテリー、農薬、危険物など。買ひ替え時に販売店に引き取ってもらうか専門業者に依頼してください。（詳細は役場住民課へ）

ゴミ出しの時刻 ~決められた収集日の午前6時から午前8時まで。

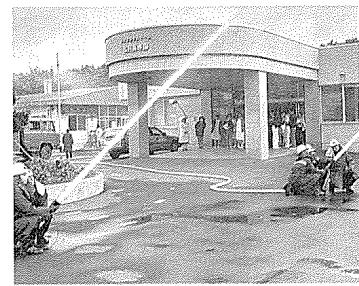
自己搬入 ~収集日以外でも、厚田村のごみ処理施設に持ち込めます。ただし「依頼書」の持参が必要です。役場住民課・太美出張所で申し込みください。



町が公募した「公共施設等見学会」に参加し、元町浄水場を視察する町民30人。近くに住んではいるものの初めて同施設を訪れた参加者も多く、皆熱心に説明を聞き入っていました。このほか、下水処理場や厚田村のゴミ処理センターなど11カ所を見て回りました。同事業は2年目で、今年3回目。(10月2日)



「ハローウィン集会」で、ジャンボカボチャの重量を計る東裏小学校の児童と父母等。学校農園で育てたもので、今年は13個が大きく成長。集会では児童全員が、観察結果を手書きの絵などを使って寸劇風に発表、集まった父母を楽しませました。
(9月30日)



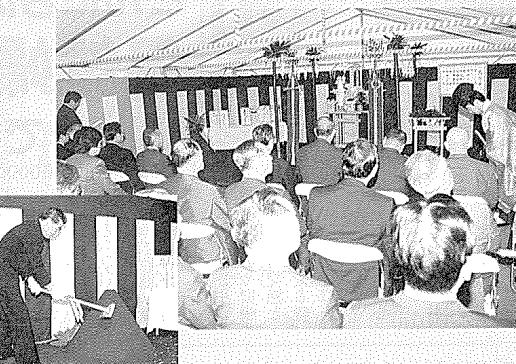
養護と特別養護老人ホーム長寿園(太美町)で行われた2團合同の模擬火災訓練。兩團の定員合計は100人。「調理室から出火」を想定した訓練では、ポンプ車などの関係車両8台が出動。ホース5本での放水や避難誘導・逃げ遅れた負傷者3名の救助訓練が迅速に行われました。(10月17日)



(異業種の27人町づくりを討議)

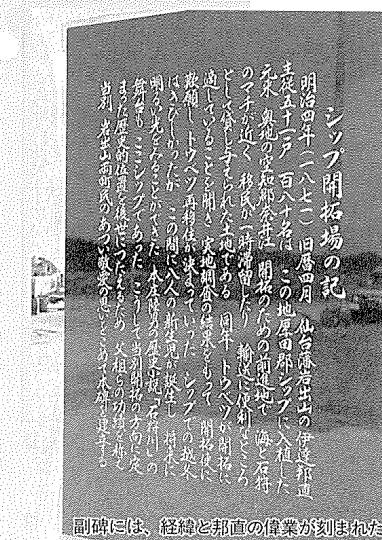
「国道沿いに当別産切り花の直売店を出しては?」など、道市町村振興協会主催の「異業種交流・地域おこしセミナー」で、討議結果を発表する参加者。参加したのは、町内企業や農協・郵政・行政などで活躍している20~40代の若手27人。町おこしにつながる発想を探るのが狙いで、地域の課題や方向性・資源活用のアイデアを意見交換後、グループ別に地域活動の展開や推進策などを発表していました。

(10月4日・福祉センター)

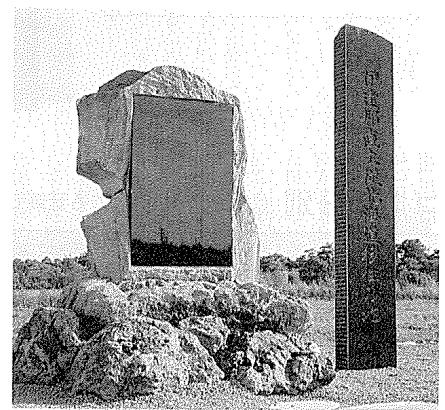


(工事の安全願い コミセンの起工式

太美町 22 番地 7 の建設地で行われた「仮称＝西当別コミュニティセンター」の起工式。式には地域の代表や教育関係者・工事関係者等約 70 人が出席、工事の安全を願い伊達町長が鍼を入れました。同センターは鉄筋コンクリート造平屋建てで、スポーツや集会施設として多目的に利用できるほか、調理実習室や研修室、図書室なども設けられます。床面積は 2,068 m² で、来年 10 月オープンの予定。(10 月 4 日)



副碑には、経緯と邦直の偉業が刻まれ



(邦直主従 移住の地の石標が完成

「伊達邦直主従北海道移住の地」を示す石標の除幕式で、標柱の前で感激の面持ちの佐藤仁一岩出山町長（写真上）と伊達町長。

式には約50人が出席。岩出山町からは、千葉英雄町議会副議長や遊佐公雄教育長等邦直公ゆかりの町民10人もかけつけました。

町教育委員会が昭和58年に建てた木標を建て替えたもので、建立地は邦直公主従が最初に移住した厚田村聚富の沿岸。

石材は岩出山町から取り寄せたもので、高さ2.4mの標柱は仙台稻井石(いいいし)、厚さ約50cmの副碑は鳴子石。標柱の文字は伊達町長が執筆し、副碑中央の黒御影石(写真左下)には経緯と偉業を称える碑文が刻まれています。(10月16日)

いまい 現在を生きる



かみむら 小美 文さん(82歳、西町)

今年春、82歳にして高校に入学。勉学に励むかたわら、町内の愛好家が集まる書道サークルの指導者としても活躍。玄遠書道会師範。タ張生まれの函館育ちで元助産婦。

「年をとつても高校ぐらいは出なければ……」と、82歳を過ぎた今年4月、日本放送協会学園高等学校・NHK学園に入学した高校1年生の上村文さん。同校はNHKが開校・運営する学校法人の高等学校で、就学期間は3年間。レポートを提出する通信制の高校で、勉強は主に朝や夜間などに放送されるNHKのテレビ・ラジオを通じて学習します。

授業は毎月2回、日曜日に札幌市にある道立有明高校で行われるほか、4・5日間泊まり込みで行われる「集中スクーリング」が年2回あります。

使っている教科書は有朋高校と同じで、学習科目数も一般的の高校とほとんど同じ。もちろん中間テストなどの試験や追試験もあります。

「今まで、産婆の仕事やボランティアも精一杯やってきました。このままじと老いるのではなく、これから的时间は自分のために有意義

に使おうと思ったんです。9月頃までは勉強に着いていくのがやっとでした。でも、前納した1年分の授業料ももつてないし、今まで1日も休まず頑張りました。勉強の遅れも今はもう大丈夫です」と笑います。

入学に年齢制限がない同校には、若い人に混じり60・70歳代の学友7人が通っているそうですが、もちろん80歳代は上村さんただ一人。同校の学校新聞でも大きく紹介されたそうです。

上村さんは昭和16年に産婆試験に合格。長年助産婦を勤めた方で、昭和57年から約2年間は、助産婦として当別町の臨時職員としても勤めていました。

勤務のかたわら約10年間学んだ書道は、昭和58年には師範の資格を取得。町内の老人ホームでは書道のボランティアとして、また長年町教育委員会主催の「書道教室」の講師を務めたほか、同道教室の終了生等で作る「書道サークル」の指導者として今なお活躍しています。

■町観光協会が5月から募集していった「当別」のキャラフレーズの応募数は、1・3・3・0・5通で締め切られました。

応募者の約95パーセントが町外の方々からの応募で、内容的には川柳風のものや「町木」「町花」の白樺とかすみ草を取り入れたものが多くありました。審査結果はもうじき発表されるようです。そこで、「乞う・ご期待!」

■10月1日から12月末まで行われる「赤い羽根共同募金運動」は今年でもう50周年を迎えるそうですが、

「募金」と聞くと、「むしろ自分に募金してもらいたいぐらいの分に……」と思われる方が多いのかかもしれません。

実際に私も、職場に訪れたボランティアの方々の姿を見たとき、一瞬「×××レ直行!」という暗号めいたものが頭の中をよぎりました。(ボランティアの方たちごめんなさい)がそこには思い留まらなかった。今年も募金させていただき

編集後記



シンボルマーク
キャラクターの「こめちゃん」